

兜跋毘沙門天の背景

——その成立の思想史的意義——

高 橋 堯 昭

はじめに

私はこの小論で、兜跋毘沙門天像の成立を通じて、東西文化の交流とこれによって作られた政治的並びに精神史的影響を考えてみたい。

然し、これは劣しい文献の中では非常に困難な問題である。幸いA・スタインやグルンウエドル、ルコック等の先学の調査された資料、並びに、大蔵経や玄奘の大唐西域記を参照にして、おぼろげながら、この問題にアプローチを試みたい。

1

大梵如意兜跋藏王呪経には如意藏王は十種の降魔の身に变现するとある。

一、無畏観自在、二、大梵天王、三、帝釈天王、四、自在天王 五、魔醯首羅天王 六、毘沙門天王 七、兜跋藏王、八、多婆天王、九、九道尊星 十、牛頭天王（傍線筆者）

兜跋毘沙門天の背景（高橋）

兜跋毘沙門天の背景（高橋）

かく普通形毘沙門天像と兜跋形毘沙門天像の二種類があることがわかる。然して、この兜跋藏王については

兜跋藏王其威徳自在亦如毗沙門天王、身相面貌忿怒降魔、吉祥円満、有無量福智光明、権現兜跋国大王形像、尽解脱急難、不離人身不代人体、唯所具足威光、飛翼翔天、遊奕最有自在、帶持大刀横劍、



1 敦煌紙本版画（開運四年A・D・九四七年）大英博物館蔵

摧折一切忿敵掃除災害、

於諸衆生令無驚怖、依

此藏王广大威徳、「大地神女

自然涌出化坐蓮葉、以掌

承大如意王足、安静結坐、

具如是大勢威力、普濟衆

生、種々心願悉令満足一云云

（大正藏、国像、第四卷、三

五三頁c）「」筆者

とある。この経は大藏經にその名の見えない經典で、且つ又、仏教のパンティオンに存在しない牛頭天王などの名があるから、中国の

宋時代の新作といわれ、鎌倉時代の編纂の阿婆縛抄にも「新渡の經典」といわれているから、藤原時代に我が国に伝ったものと推定されている。⁽¹⁾ 然して問題は、この経の生れた時に、兜跋毘沙門天像が最早や成立して、二種の毘沙門天像があったことである。

この両者の差は、普通形のそれは、写真2の如く邪鬼をふんまえ、躍動的で左右が不整合であるのに対し、兜跋形は地天が捧げる形で、⁽²⁾ 正面性、やや硬直化が目立つが、頭に鳳凰のついた冠をかぶり、膝まで垂れた左前の金鎖の鎧



2 敦煌発見紙本

をつけ、腕には海老籠手といわれる金属片をつづつた環状の袖をつけている。特に普通形のダイナミック性は西域敦煌の壁画にまで及んで、その特徴を示している。

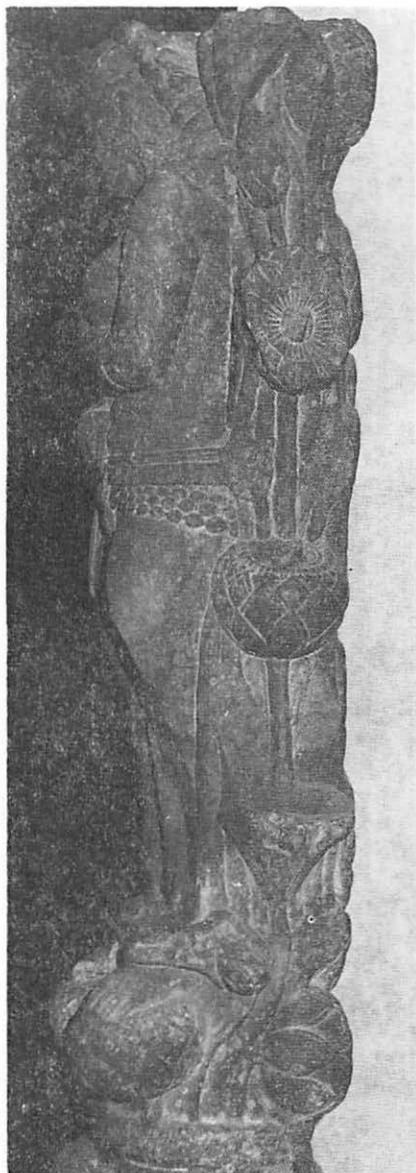
兜跋毘沙門天の背景（高橋）

この傾向は日本にまで及び、兜跋形は羅城門楼上に置かれたという、京都の東寺の像と他の普通形の毘沙門像の対比でも明らかであろう。ちなみに、この東寺の像が実に西域的なのに比して、兵庫県の達身寺のそれは普通形の毘沙門天の服装に同化し、紀州道成寺では更に一步この傾向を進め、大宰府の観世音寺のものになると、両足が地天に支えられるのを除いて、何ら異なる所がなくなつて来る。従つて、この兜跋形が左社（左社）や正面性等後述の如き西域風の特徴をもつ所から、その成立の場所が推定される。否その場所だけではなく、その場所どころした像を作り出した思想の変化が、なぜもたらされたかが注目されねばならない。

即ち、普通毘沙門天像が、邪鬼をふんまえている。邪鬼側からすれば、「他動的にふんまえられている」ものから写真1の如く「主体的に」毘沙門天を「捧げもっている」ところに「思想的深化」「立場の飛躍」が示されているものと考へる。

2

そもそも毘沙門天のルーツは、パールフットやマトウーラのストウーパの欄楯の柱に彫られているヤクシャ・ヤクシーのように、大地の生命力に対する信仰に根ざす。大地の生命力の表現が聖樹であり、その人格化がヤクシャ・ヤクシーである。この一体化を表現したユニークな彫刻がある。写真4の如く表から見ると豊満なヤクシー像だが裏面は植物の茎や花である。これは男性のヤクシャでも同じ、写真5の如く巨大なヤクシャの両足の間に木の芽が萌え出ているからである。これは写真3の如く豊満な女神が足を木の幹にからめ、手で枝をつかんでいる「樹と夜叉の一体像」からも理解される。⁽⁶⁾



4 マトウーラヤクシニー
マトウーラ博蔵



3 パールフットヤクシニー
カルカッタ博蔵



5 ヤクシヤ マトウーラ博蔵

然もこれらの像は不可思議なものをふんまえている。人間らしいもの、牛や馬、ましてマカラといつて、尾が魚で体が動物のもの、更には植物の花や水の壺もある。これらは、大地の生命力、その大地をして豊穡ならしめるモンソンの雨即ち「水」を表しているといわれている。⁽⁷⁾

こうした不可思議なものをふんまえている像を見ると、明らかに普通毘沙門天の「邪鬼」はこのインドの伝統の下にあることがわからう。然しこれに対して前述の如く、意識的に「捧げもつ」ものは異った系統のものといえよう。

インドの大自然から生れた夜叉信仰は、孔雀王呪經の示すが如く、各種族で、恰もトーテム神の如く、夫々部族の主神として祀られて居り、總數二百(8)に及ぶ夜叉を中心に彼等が生活していたことがわかる。これはインドの生活が大樹を中心として、その根方で寄り合い、冠婚葬祭等の通過儀礼を行って、その生活はその土地その土地のいろいろの大樹と切っても切れぬものであったからである。これは原始經典に隨所に見られる所である。

然し、人間の意識が発達して来ると、人間社会の狀態の感情移入がこの夜叉の世界にまで及び、主長と家来の系統だてが行われた、その頂上に立ったのが、バイスラバーナ(毘沙門天)であった。

長阿含第二十四分世記經四天王品第七

「若毘沙門天王。欲詣伽毘延頭園遊規時。即念提頭賴天王。提頭賴天王復自念言。今毘沙門王念我。即自莊嚴乘宝車。真無數乾沓和神前後廻邊。詣毘沙門天王前於一面立。……毘樓勒天王……毘樓婆又……四天王大臣……毘沙門天王常有五大鬼神。待衛左右。一名般闍樓。二名檀陀羅。三名薩摩跋陀。四名提偈羅。五名修逸路摩。此五鬼。常隨待衛。毘沙門王福報功德威神是。」(長阿含世記經四天王品)と。(大正一—三〇〇)

起世經卷第六四天王品

「爾時毘沙門大天王、即亦自著衆宝璽珞、莊嚴其身、駕種種乘、与提頭賴吒、毘樓勒迦、毗樓博叉等四大天王、各將所屬諸天王衆、前後廻邊、皆共往詣迦毘延多園苑、到已在苑門前、暫時停住、諸比丘、其迦毘延多苑中、自然而有三種風輪、謂開淨吹、開者開彼園門、淨者淨其園地、吹者吹其園樹、令飄颺、諸比丘、迦毘延多苑中、所散衆花、積至于膝、種々香氣周遍普熏、爾時毘沙門大天王、提頭賴吒天王、樓勒迦天王、毗樓博叉天王等、与諸小王及衆眷屬廻邊、共入迦毘延多苑中、澡浴遊戲、種々受業、在彼園

兜跋毘沙門天の背景(高橋)

中「漢浴訖已」（大正一—一三四〇a）

これは毘沙門天王が他の三天王やその眷族を従えて園苑に遊ぶ敦煌の「行道天王図（写真6）」がこれを図示して



6 敦煌画中行道天王図 大英博物館蔵

いる如くである。

一方、これと時代的にも前後するが、ガンダーラでは、土俗神パンチカとハーリティが信仰されていたが、西からの外来民族は、富の神である火の神フアローヤ、生産増殖の神アルドクショーの信仰をもって入って来た。これらがガンダーラの地で「習合」した。習合とは同じ性格の神を一方の民族はパンチカとし、他の民族はフアロー、又ハーリティをアルドクショーと見なして一つのもを両

方で矛盾なく信仰することである。異民族雑居の普遍的世界ならではの妥協的な考えであった。これがクシャン朝で行われていた。⁽¹¹⁾この点に関しては、私はいろいろの論文で述べて来た。



7 タフト・イ・パーイ出土
 ファローとアルドクショー（パンチカとハーリティ）
 物大英博館蔵

との総合である。即ち、インドはモンスーンの雨によって、「樹が生え収穫が得られる。それがこすれ合って「火」が出る。「水↓火」という思想体系がリグ・ベータ以来の伝統である。⁽¹²⁾

一方砂漠では、強烈な太陽がすべてを焼きつくす。地上の水分を余すところなく地表から蒸発させる。これが集って雲となり、物凄い雨を降らす。砂漠の雨は「ノアの箱舟」の神話の示すが如く、すべての生命を洗い流すが如く洪

兜跋毘沙門天の背景（高橋）

更に、これらが仏教の中にとり入れられて来る。火の神ファローと習合したパンチカはインドのヤクシヤ・ヤクシーの主長たるクベラ・バイスラバーナの五人の大將軍とし（前述長阿含世記經）やがて毘沙門天そのものと習合されて区別が分らなくなっていく。一方アルドクショーと習合したハーリティは、これ又鬼子母神として、仏教の中にその地位を占めた。

私が特に興味をもつのは、西方の「火」の神と、インドの「水」の神



8 四天王仏鉢供養図 ペルシャワル博蔵

水をもたらすと同時に砂漠に生命の「再生」「復活」をもたらす。私の体験ではアフガニスタンのバルフで、或はシリア砂漠で、はた又イランのシラーズからベルセポリスへの道でこの「火による雨」によって砂漠が再生し、前に見た焼け果てた砂漠と全く別物と思われる程であった。従って砂漠では「火↓水」の構図が見られた。⁽¹³⁾

かくて火の神たるファローと水の神ヤクシャ・ヤクシーが習合してパンチカとなりクペラ・バイスラーバーナとなることは「火」と「水」の両文化が、毘沙門天の中に綜合凝結されていると言えよう。

3

こうした「火」と「水」の文化を兼ねそなえた毘沙門天が仏教の中に確固たる地位を占めて行く。例えばガンダーラ彫刻の「仏鉢供養図」の如く、三天王と共に積尊に「鉢」を供養している像のように、仏教の中に深くかかわって来る。

然しここで注意すべきことは、未だ武装していないで、ギ



9 タカール（ベジャワル附近）出土 パンチカラ ホール博蔵

リシヤの服装をしていることであり、且つ又段々武器をもったものが現れて来ることである。その最たるものはタカール出土の巨大なパンチカラ像である。これは又サリパロール出土の三叉の槍をもち牙をむき出した鬼子母神の像についても言えることで、共に守護神的性格が出て来ているといえよう。然も、個人というより、クシヤンという国家の¹⁴⁾安寧を祈る方向に進み、更に西域に仏教が進むと、この傾向はますます顕著になつて行く。

然らばこの「守護神的性格」ほどの範圍に見られるであらうか。

大西域記卷第一、迦畢試国の条に

仏院東門南大神王像右下坎地藏
宝、質子之所蔵也、故其銘曰、
伽藍朽壞取以修治、近有辺王貪
婪凶暴、聞此伽藍多蔵珍宝、驅
遂僧徒方事堯掘、神王冠中鸚鵡
鳥像乃奮羽驚鳴地為震動、王及
軍人辟易懼仆、久而得起謝咎以
婦（大51—八七四a）傍線筆者
と、カニシカの夏の都カピシにあ

兜跋毘沙門天の背景（高橋）

ったシナから送られた人質の寺の地下に埋められた財宝を盗ろうとした盗賊に、天王の冠の鳥がばたばたして、大地震が起り、驚いた盗賊は逃げ去ったとか、或は大唐西域記卷一縛喝国の納縛僧伽藍で

……近突厥葉護可汗子肆葉護可汗、傾其部落率其戎旅奄襲伽藍欲圖珍寶、去此不遠屯軍野次、其夜夢見毗沙門天曰、汝有何力敢壞伽藍、因以長戟貫徹胸背、可汗驚寤痛苦心痛、遂告群屬所夢、徵馳請衆僧方伸懺謝、未及返命已從殞歿伽藍內……（大51—187—2c）傍線筆者

で突厥王が毘沙門天の寺を攻撃伽藍を破壊しようとした前夜、夢枕に立たれた天王は長い槍で王の胸をつきさした。驚いた王は神前で懺悔しようとしたが、時既におそく絶命したとある。

更に罽薩且那国の条には

……其王遷都作邑、建国安人、功績已成、齒鑿云暮、未_レ有_二胤嗣_一、恐_レ絶宗緒_一、乃往_二毘沙門天神所_一、祈禱請_二嗣神像額上_一、剖_二出嬰孩_一、捧以回_レ駕、国人称_レ慶。既不_レ飲_レ乳、恐_二其不_レ壽_一、尋詣_二神祠_一、重請_二育養_一。神前之地、忽然隆起、其状如_レ乳、神童飲吮、遂至_二成立_一、智勇光_レ前、風教遐被、遂營_二神祠_一、宗_二先祖_一也。自_レ效已降、奕世相承、伝_レ国君臨、不_レ失_二其緒_一、故今神廟多_二諸珍寶_一、拜祠享祭無_レ替_二於時_一。地乳所_レ育、因爲_二国号_一。（大正蔵、第五十一、九四三頁b）傍線筆者

とあり、今の西域ホータンのことについて述べている。この国では国王に子がなかったので毘沙門天王に祈ると天王の頭から赤子が誦出した。（写真1の毘沙門天の向って右の侍者によって捧げもたれた小児がそれを示す）然しこの子は乳を飲まなかったので、再び祈ると神前の地が隆起して、恰も乳房のようであった。子供はこれにむしゃぶりついで乳を飲んで成長、これがこの国の先祖となったとある。

然して問題なのは、この後で大唐西域記に鼠がこの国を救ったことが記されていることである。

王城西百五六十里、大沙磧正路中有三堆阜、並鼠墳也、聞三之土俗二曰、此沙磧中鼠大如レ蝸、其毛則金銀異レ色、為三其群之酋長、每出穴遊止則群鼠為レ從。昔者匈奴率三數十万衆二寇三掠辺城、至三鼠墳側一屯レ軍、時翟薩且那王率三数万兵、恐三力不レ敵、素知三磧中鼠奇而未神也、洎三乎寇至二無レ所求レ救、君臣震恐莫レ知三圖計、苟復設レ祭焚レ香請レ鼠、冀其有レ靈少加三軍力。其夜翟薩且那王夢見三大鼠、曰敬欲三相助、願早治レ兵、且日合戰必当三克勝二翟薩且那王知レ有レ靈祐、遂整三戎馬、申令三將士、未明而行、長驅掩襲、匈奴之聞也、莫レ不レ懼焉、方欲三駕レ乘被レ鎧、而諸馬鞍人服弓弦甲縛、凡厥帶米鼠皆齧断、兵寇既臨而縛受レ戮、於レ是殺三其將、虜三其兵、匈奴震懾以為三神靈所レ祐也。翟薩且那王感三鼠厚恩一建レ祠設レ祭云々(大正51—94 a b)

これは毘沙門天王の名は出ていないが、明らかに、毘沙門天王の眷属としての鼠のことである。即ち不空訳毘沙門天王儀軌の西城の安西城と同じ話だから、ホータンでも前述の子供を与えた財宝神としてだけではなく、守護神として祀られていたことがわかる。

毘沙門天王儀軌に

領天兵救援安西故来辞。聖人設食発遣。至其年四月日。安西表到云。去二月十一日已後午前。去城東北三十里。有雲霧斗闕。霧中有人。身長一丈。約三五百人尽著金甲。至酉後鼓角大鳴。声震三百里。地動山崩停住三日。五国大懼尽退軍。抽兵諸營墜中。並是金鼠咬弓弩絃。及器械損断尽不堪用。有老弱去不得者。臣所管兵欲損之。空中云放去不須殺。尋声反顧城北門樓上有大光明。毘沙門天王見身於樓上。(大正—21—22 a b)

即ち安西城がとりかこまれたので毘沙門天王に祈ると数百の丈余の天兵が鎧を着て霧の中から出来、太鼓等で大声

兜跋毘沙門天の背景（高橋）

をあげたので、三百里にわたって、大地が振動し、山が崩れたので、大軍は退散。その夜、金の鼠が現れて鎧や弓の糸を食いちぎり、更に、北門楼上で大光明が出、毘沙門天王が現れたので生命からがら逃げ出した。

『宋高僧伝』巻第一「不空伝」の条の如く

……蕃部驚潰、彼宮壘中有鼠、金色。咋弓弩弦皆絕。城北門樓有光明天王、怒視蕃帥大奔、帝覽奏謝空、

因勅諸道城樓置天王像、此其始也。（大正藏、第五十、七一四頁a）傍線筆者

そこで帝王は諸道に命令して、城の樓門には毘沙門天像を祀らしめた。樓門に天王像を置くのはじめであるとする。

かくて、アフガニスタンのカピシ、バルフ、そしてタクラマカン砂漠をはさんで南北のホータン、クツチャという範圍に守護神としての毘沙門天信仰のあったことがわかる。特に砂漠のオワシス国家は規模が小さい。そして平和的な通商で生きている為軍事的には強くない。為に匈奴等の強大な遊牧国家が攻めて来たらひとたまりもない。そこでタカール出土の像の如き、守護神的性格がますます要請されて来た。こうした性格を強調した一つが「兜跋」形の毘沙門天像の出現であると思う。

4

兜跋形ではいろいろの特徴が目立つ。これらをオーレル・スタインが敦煌で入手したといわれる大英博物館蔵画像について考えてみよう。読者は前掲写真1の特徴を以下の記述と照し合せて見ていただきたい。

A、鳥

カピシで盜賊が天王の冠の鳥が羽ばたくのに驚いて逃げたとの大唐西域記の記事や、安西城の像を模したといわれ



10 スワット出土焰肩仏(肩から火、足から水)上の鳥に注意
筆者蔵

くりで、ササンペルシャの武人の典型を毘沙門天像に見る思いがする。

B、火

写真1の敦煌の画像の如く、肩から三日月を立てたように頭部の両側に火炎が立ちのぼっている。

所謂「火焰光背」である。これらは大英博物館蔵の絹本兜跋像やセリンディア XCH (デリー中亜博蔵) (松本氏

兜跋毘沙門天の背景(高橋)

る東寺蔵の像の冠に鳳凰がある。勿論この鳳凰は中国文化の影響であるが、もともとはフファルナフ(魂)を天に運ぶ鳥である。従って写真10の如くガンダーラの彫刻の部分に沢山描かれている⁽¹⁵⁾。最も有名なのは、タキシラのギリシヤ人の町シルカップの双頭の鷲の寺院のものである。

毘沙門天像の冠の上にも鳥全体のものや、写真1の冠の如く羽根をひろげたまさを図案化した冠をかぶったものもある。これらは写真11のイランのコスローニ世の狩猟図の王の頭部とそっ

兜跋毘沙門天の背景（高橋）

敦煌画の研究附图121b 122a) 等でも同じである。兜跋形ではないが写真6の敦煌行道天王像に至っては炎々たる炎が頭部の前後にたなびく。

これらは法天訳「仏説毘沙門天経」に

北方世界有葉叉名俱吠囉有大威徳身光熾盛如大火焰（大正一21—二一七b）

とある。問題は経典が先か、こうした像や絵が先かであろうが、常識的に「火」の文化を背景として、こうした経典の文章が出来たと考える方が自然である。

火はリグ・ベータ以来インドにあることは勿論だが、このオワシス国家群はベルシヤ系の人種であり、且つ又ベルシヤ系の文化が多くこの地に流入しているから、ゾロアスター教とまで特定出来ないまでも等、ベルシヤの「火」の宗教の影響と考えた方が自然であろう。

C、長いスカート

現在の毘沙門天像でも肩から体の両側に長い布を垂らしたものがあつた。今は原型の意味を失つて、単なる装飾とな



11 ササン朝コスロー二世狩獵文銀皿
松本氏敦煌画研究より複写

っているが。

このスカーフは敦煌の写真1でも、同様に松本氏敦煌画の研究附図(119a, 120b, 122a, 123a, 123b, 124a, 121c)にも認められる。これらは法隆寺壁画の飛天の如く、はた又西域の千仏洞や敦煌の飛天が美しい「羽衣」をまとうて天上を舞って仏をことほいでいるのと規を一にする。



兜跋毘沙門天の背景(高橋)

12 キジール武人像(グルンドウェデルのスケッチ)
Le Coq Buried Treasures of Chinese Turkistan
(源氏論文より複写)

これらは

『洛陽伽藍記』卷第五、擬円寺、宋雲惠生西域
巡行記中「于闐国」の条、

至于闐国、王頭著金冠、似鷄幘、頭、頭後
垂三尺生絹、広五寸、以為飾。(大正蔵、

第五十一、一〇一九頁a)

『北史』西域伝「龟兹国」の条、其王頭繫綵
帶、垂之於後、坐金獅子床。

Stein, Ancient Khotan Pl, LIX

Stein, Serindia PL, CXXV

以上からして、七・八世紀に東トルキスタン一帯
にもこの風習が行われていたことがわかる。然し
て、そのルーツはサザン朝やパルチヤ時代のヘル

兜跋毘沙門天の背景（高橋）

シャにその例を求められる。即ち前掲写真11のコスロー二世やバラーム二世等ペルシャの王の像の後方には必ず二条の布がはためいている。

D、左あわせの服

杜氏通典西域伝「且末国」に、「土人前髮著毘帽二小袖衣為レ衫 則開レ頸而縫前一

とあるが、これは「梁書」諸夷伝

「末国」の条や、「南史」夷貊伝

「末国」の所にも同じ表現があっ

て、「首の所をあけて、左衽せ」

であったことがわかる。これらは

マトゥーラやアフガニスタンのス

ルフコタル出土のカニシカの巨大

な石像（写真16）や写真12のクツ

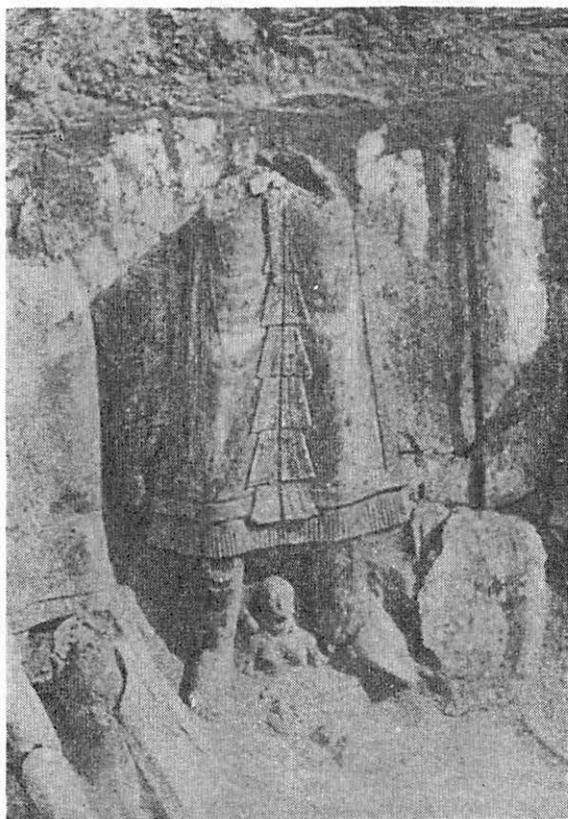
チャの武人像等の遊牧民の服装

で、六・七世紀の東トルキスタン

一帯に流行したイラン系男子の服

装であった。

源豊宗氏は「仏教美術」十五号



13 Ancient khotan XIV (Rawak stupa の解説) より複写



14 Ancient khotan XIV (Rawak stupa の解説)より複写

(昭和五年一月)に次の如く述べている。「兜跋毘沙門は何れも支那では胡風とせらるる左衽である……この服装に最も相近いものを西域に求めてみる。ギジール、即安西域の故地において……

A. Grunwedel 氏の Alt-Kutscha の壁画の一部であるが、この中央の人物が着ているものは恐らく皮革製のものと見えるが、その左衽にして且つ膝までも達する長き服は、まさしく兜跋毘沙門のそれと同じもの」と述べている。

こうした影響から兜跋形には左衽が多い。勿も右衽もあるが、これらは中国文化の西漸の影響である。(中国では左上位という思想から左が前になる然し胡は右が前に出て左がかくされる) 即ち左衽として

は大英博蔵 スタイン招来紙本(松本、附図一二〇a)

兜跋毘沙門天の背景(高橋)

兜跋毘沙門天の背景（高橋）

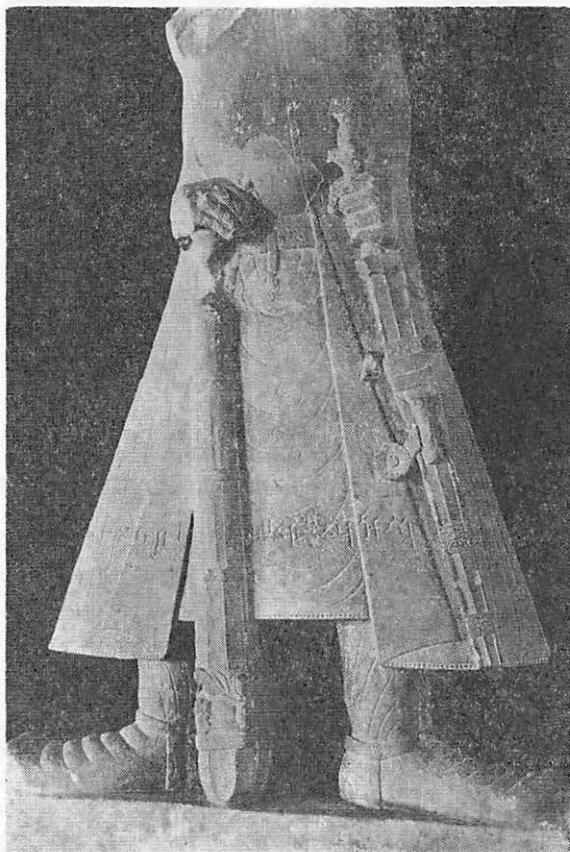
ルーブル博蔵 ベリオ招来紙本（スタインと同版）

安西省万物峽石窟内壁画（AD九〇〇年頃）（松本附図二二一c）

然も前掲のクツチャ武人画の如く、長刀を縦に垂らし、短刀を横に恰も十字の如くさした像が出て来る。日本の醍醐寺智泉本兜跋毘沙門天像が、敦煌（松本120b 120a 121b）の如く一本刀になり遂には手にもっても腰にはささなくなる。更にこれも普通毘沙門天では武装しない方が普通となる。これも兜跋形の特異性の一つである。

更に兜跋形の特徴の一つは正面性であるが、これはシリヤのパルミラの像以来の正面性の影響をうけているといえよう。

かくして、前述して来たように、霊を天上界に運ぶ鳥、そして火、更に神聖さを示す羽衣を思わす薄布、そして遊牧民の服装そして帯刀、又正面性等、ま



15 マトゥーラ出土 カニシカ半身像 マトゥーラ博蔵

さにペルシャ文化の影響歴然たるものをそこに見る思いである。

4

こうして考えて来ると、兜跋像はペルシャの文化圏で形成されて来たことがわかる。

考古学的にもこれは証明される。

即ちスタインの Ancient Khotan

で示されているように (Rawak の stupa の説明写真 XIV) 、塔のまわりに、沢山の仏菩薩の像がぐるりとストウツコで作られている中に、地天が神の足下に涌现しているのが二つ見える。

この中で、写真13の方は写真16のスルフコタル出土のカニシカ王像の如きものの足下に豊かな乳房をもった女神が涌出している。

もう一つの写真14の方は写真15の



16 スルフコタル出土 カニシカ半身像 カーブル博蔵

兜跋毘沙門天の背景（高橋）

マトウーラ出土のカニシカ像の如き遊牧民らしいズボンとブーツ姿の下半身の下に涌现していることは注意さるべき事柄である。更に写真17の示すが如く敦煌の千体仏の紙本の中から、やはりカニシカ王の如き服装をして、地天の上に立っているものが出ている（Serindia XCII デリー中亜博蔵）。この像は又前述の如く鳥の羽根をひろげたような冠をかぶり、飛天の羽衣の如き薄絹を左右に垂らしている。

これらは共にカニシカの下半身像にそっくりである。クシヤン朝ではスルフコタルの神殿にカニシカやフヴェイジカを神として祀っていたから、カニシカ等のクシヤンの武人帝王をモデルとして兜跋形が形成されたと推測される。百歩ゆずって、クシヤンの支族である。ホータン王を模して兜跋形が作られたことは明らかである。これは写真1の毘



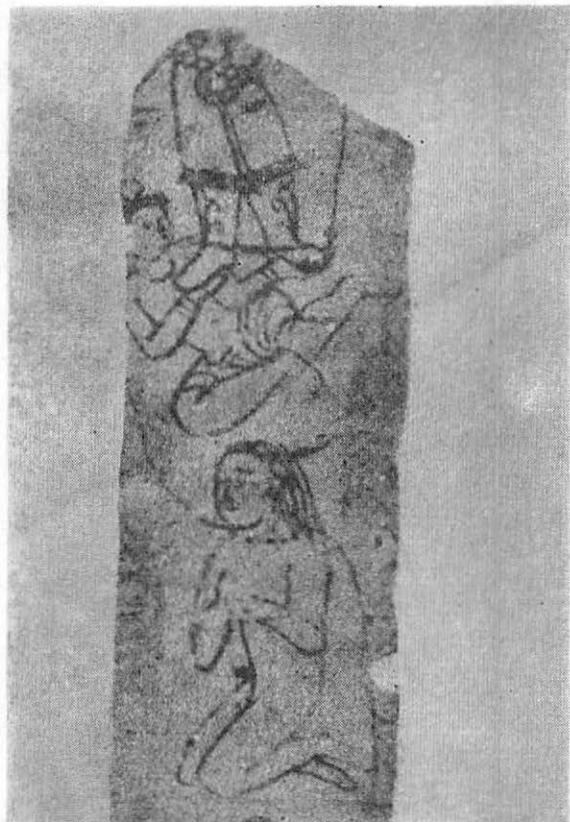
17 敦煌出土 兜跋毘沙門天像 紙本
Serindia (四卷) XCII デリー中亜博蔵

沙門天の侍者が頭上高く赤子をいただいていることがこれを証し、且つ又前述の大梵如意兜跋藏王呪経の「権現兜跋国大王形相像」が、この間の消息を物語っていると見えよう。

5

さて兜跋像は邪鬼ではなく、地天の上に立つのであるが、それは地天を踏むのではなく逆に地天が「捧げもつ」即ち他動的に踏まれるのではなく主体的意識的に捧げもつ所が注意されねばならない。

ここに適切な事例がある。それは写真18のコータンの Khadalik より発見された紙本墨画の一断片である。⁽¹⁶⁾これは上の天王は上半身が失われているが毘沙門天王の下半身



18 コータンの Khadalik 発兜跋像
Serivdia四卷 XCI Kha, i, 50

兜跋毘沙門天の背景(高橋)

兜跋毘沙門天の背景（高橋）

は明らかに Rawak 出土の像に似ている。松本氏は敦煌画の研究で「胴の緊窄せるイラン式服装を着けて居ることは明瞭に観取せられる。然もこの画の製作年代が七世紀頃と推定せられることは、以て極東の兜跋毘沙門天の起源を考える上の貴重なる研究資料と見做し得る。即ちイラン式服装と毘沙門天との結合が、その時代に和闐地方に於て見られるという事実は、兜跋毘沙門天像の発生に関する地現的源泉を暗示せるものと言うべきである」（全書四四九頁）と言っている。

とにかく、バールフットやマトウーラ以来の邪鬼をふんまえる伝統に立つ普通形の像とは、全く異質な像の出現といえよう。

然らば何故にこのような立場が出来して来たのであろうか、私は金光明最勝王経に、今までとは異った立場の飛踏の源泉が見出されると考えるものである。即ち

『金光明最勝王経』卷第八「堅牢地神品』

爾時堅牢地神即於衆中從座而起、合掌恭敬、而白仏言、世尊、是金光明最勝王経、若現在世、若未來世、若在城邑聚落王宮樓觀、及阿蘭若山沢空林、有此経王流布之处、世尊、我当往詣其所、供養恭敬擁護流通、若有三方处、為説法師敷置高座、演説経者、我以神力、不現本身、在於座所、頂戴其足、（中略）、爾時堅牢地神白仏言、世尊、以是因縁、若有四衆、昇於法座、説是法時、我当昼夜擁護是人、自隱其身、在於座所、頂戴其足、（大正藏、十六、四四〇頁 a c）傍線筆者

『同経』、卷第八「王法正論品』

爾時此大地神女、名曰堅牢、於大衆中、從座而起、頂禮仏足、云々（大正藏、十六、四四二頁 a）

とある。即ち地神は説法師の為に、「自分の神力をもって、自ら姿をあらわさず、仏の座所の下で、その御足を頂戴致します」と世尊に「誓願」をたてている。即ち「支えもつ」ことを自覺的に誓いをたてている。ここがパールフツトと立場の異なる所である。

堅牢地神がその誓願に従って天王の足を頂戴すると同時に、毘沙門天王自体が誓願をたてている。即ち金光明最勝王經四天王護國品第六に、

爾時多聞天王。從座而起白仏言。世尊。我有如意宝珠陀羅尼法。若有衆生。樂受持者。功德無量。我常擁護令彼衆生離苦得樂。能成福智一種資糧。欲受持者。先當誦此護身之呪。即說呪曰……（大—16—四三〇c）（傍線筆者）

又

世尊。我若見此誦呪之人。復見如是盛興供養。即生慈愛歡喜之心。我即變身。作小兒形。或作老人。或作之像。手持如意末尼寶珠。并持金鬘。入道場內。身現恭敬。口稱仏名。誦持呪者曰。隨汝所求。皆令如願。或隱林蔽。或造寶珠。或欲衆人愛寵。或求金銀等物。欲持諸呪。皆令有驗。或欲神通壽命長遠。及勝妙樂。無不稱心。我今且說如是之事。若更求余皆隨所願。悉得成就。寶藏無盡。功德無窮。假使日月墜于地。或可大地有時移轉。我此實語終不虛然。常得安隱。隨心快樂。世尊。若有人能受持誦誦是經王者。誦此呪時。不假疲勞。法速成就。世尊。我今為彼貧窮困厄苦惱衆生。說此神呪。令獲大利。（大正16—四三—c）（傍線筆者）

即ち毘沙門天王自身が「身を変えて小兒や老人、比丘の姿になり、手に宝珠や財宝の袋をもって、仏の名を唱え、

兜跋毘沙門天の背景（高橋）

呪をとなえる者に願いをかなえしめよう、又たとえ日月が地に陥ちても、大地が動いても、この経王をとなえ、呪をじゅうす者には、貧困や苦悩から離れしめ、大利を得させようと、私は仏にお誓い致します」と仏に誓う、いわば地天と毘沙門天の二重の誓願の上にこの像は作り出されているものと思う。

前述の不空訳の毘沙門天儀軌の「毘沙門天が安西城門上に出現した」という話も、この神の「誓願」と、これをひたすら「信」ずる衆生との関係を示すものに外ならない。

即ち、1、夷狄が攻囲する。2、経を誦すると神兵が現れる。3、蕃部は驚き潰えた。4、金色の鼠が現れ武器の糸をかんで使用不能にした。5、城楼に光明天王が現れ蕃兵の逃げるのを怒視したというこれらの話の根本は「経を誦することが根本になっている。誦すとは、ひたすらすがりつく信である。法華経の「たとえ一句でも受持誦誦し解説書写する」という「信」である。然も信とは仏の誓願を信ずることである。これが最前提となっている。

こう考えて来ると、これこそ「上求菩提」の小乗の立場ではなく、「下化衆生」の大乗への飛躍があり、これありてこそ、この地天が天王を捧げもつ兜跋形の毘沙門天像の成立があるのであった。

Ravak や Khadālik の像のあるホータンは華嚴経の編纂されたという大乘仏教の早くから発達した所である。この地で「誓願」を軸とした兜跋形が成立したことはけっして不自然なことではないと私は思う。

む す び

かくして兜跋像は成立した。それはインドの聖樹夜叉信仰、即ち「水」の文化と、ヘルシャ及び西アジアの文化である正面性・鳥・スカーフ等で象徴される、砂漠の所謂「火」の文化等を合した毘沙門天信仰がクシャンの普遍的世

界で成立した。

然もそれらはインドの大地の生命力の表象たる樹神、ヤクシヤ・ヤクシーの伝統たる財宝神に止らず、オワシス国家をおびやかす強力な遊牧国家との緊張から、タカール出土のような武神像を経て、クシヤン朝の強力な帝王観を加えて行つた。そして最後に大乘仏教の精神につつまれた像が出現するに至つた。即ち「誓願」を「信ずる」という信仰に支えられて、兜跋毘沙門天像の成立を見た。

まさに兜跋形こそ、東西の文化、「水」と「火」の大乘の「誓願・信」による綜合であると私は信ずるものである。

[註]

- (1) 「仏教美術」第15号源豊源兜跋毘沙門天の起源五四頁
- (2) 敦煌出土絹本大英博蔵(松本氏敦煌画の研究附図)(CXIX, 119図)
- (3) 敦煌猪川和子地天に支えられた毘沙門天彫像—美術研究第二二九号—
- (4) マトウーラ博物館蔵
- (5) カルカッタ及マトウーラ博物館蔵
- (6) 写真4、パールフット出土、カルカッタ博物館蔵
- (7) Coomaraswamy Yaksas 四九頁註
- (8) 仏母大孔雀明王經卷中(大正一四二三三a—四二六a)
- (9) 敦煌壁画行道天王図 写真6
- (10) プリティシム博物館蔵タフト・イ・バーイ出土パンチカとハリティ像
- (11) Rossfield Dynastic Art of Kushanの各種のノイン
- (12) R. V. (X-82-5) Y. V. (W-6-2) 「空に先立ち、地球に先立ち、神に先立ち、水が最初に保たれ、すべての杯芽がその

兜跋毘沙門天の背景(高橋)

兜跋毘跋闍門天の背景（高橋）

中で神が存在する」Satapatha Brahmana VI—4—1—8「あらゆる存在の本質は大地であり、大地の本質は水である」

(13) G. Widengreen Les Religions de l'Iran III—四〇頁のインローエ王の話参照

(14) 奉獻銘 タキシム出土 patka 銅版銘文（勝谷目録一七八六）、wardak 出土舍利堂銘文（勝谷一八〇二）

(15) 写真12 筆者所蔵 焰肩仏の頂部の鳥に注意

(16) Stein, Sèrindia

(17) クシヤンの帝王は神の代行者菩薩の如き存在 日本仏教学会年報第五十一筆者、ガンダーラ彫刻にあらわれた菩薩観第六

参照

参考文献

Stein, Ancient Khotan

Stein, Serindia

Comaraswamy, Yaksa Cult

Rosenfield, Dynastic Art of Kushan